印度學佛教學研究第三十八卷第一號　平成元年十二月

楊岐方会の基本教理

岩村康夫

白雲守端の自題がある『頌古一百十則』には、彼の師である楊岐方会の語が六則（『楊岐方会和尚語録』に一則、『楊岐方会和尚後録』に三則、『嘉泰普灯録』に二則、同じ問答や示衆が見られる）取り上げられている。それらは、白雲が選んだ楊岐禅の基本的公案であろうが、論理的思考の理解を超絶した教外別伝底が直示されていると推定されるので、そこに教理を見出だそうとするのは愚行であろう。また、白雲守端が上堂語に引用している楊岐方会の答話（「僧問楊岐。如何是不動尊。楊岐云。大衆斉著力」、同じ問答は『楊岐方会和尚後録』にのみ見られる）は、楊岐の宗風の特徴が示されていると憶測しているのであるが、そこから教理を引き出す手掛かりが見出だせない。そこで、『楊岐方会和尚語録』と『楊岐方会和尚後録』中、経論や古人の語句を引用している上堂語に注目し、そこに含意する教理に対する楊岐方会の態度や見解から彼の基本教理を推定しようと試みた。

『信心銘』の一句であり、華厳教理の根本句として周知の「一即一切、一切即一」の引用は二回あるが、同一主旨の楽普元安の「一塵纔挙（起）大地全収」の引用も二回あり、楊岐方会が日常よく引用し、その一（一塵）を「拈起拄杖」によって直示することも常套手段にしていたと推測される。これらの上堂語や〈拈起拄杖〉については、既に拙論「禅門における拄杖子の用途とその意味」（『印度学仏教学研究』36巻1号）や「拈拄杖考」（『大乗禅』65巻12号、『同』66巻3号）で述べたが、要するに、一色塵の挙起（拈起拄杖）の処に一切法（山河大地）と一切智（諸仏天下老和尚）が成就していると教示するものである。そこにおいて、現実を離れず（闘裏中撞著者箇）時間空間を超越している（須彌山上走馬、大洋海裏跩跳）〈唯一の体験〉の現在を自覚すれば、それが即今の〈一切〉であること、その〈唯一の体験〉が而今における〈一心〉の現成であることを知るのである。

一切の法が一心の所造であることを意味する「心生種々法生、心滅種々法滅」（『大乗起信論』）について、楊岐方会は拄

杖を拈起し、卓一下して「大千世界百雑砕、捧鉢盂向香積世界喫飯去也」と言っている。この上堂語は、一色塵（拈起拄杖）一声塵（卓一下）一味塵（喫飯）の生滅が世界の生滅（世間）であり、それがそのまま戒定慧解脱知見の功徳を具足している如来の甘露味である衆香の世界（涅槃）である、と解することができる。世間と涅槃は、離れて別に在るのではなく、一如なのである。

即今此処に仏土仏智の成就を見る「無辺刹境、自他不隔於毫端。十世古今、始終不離於当念」（李通玄『新華厳経論』）に対し、楊岐は禅床を拍つこと一下して「怛薩阿竭二千年」と言っている。一声塵（一境）に無辺の仏土を現成し、一念に永遠の怛薩阿竭（タターガタ）を成就していると示している。普通、客塵煩悩として理解されている一塵が清浄な仏土や如来と異ならないと言うのである。楊岐方会は、一心一塵一境一念一法を拈起拄杖や拍禅床一下等で示すことにより、仏土も仏智も即今此処の体験と別ではないと明かすと共に、日常の体験が本来清浄であることを教示している。

「心是根、法是塵、両種猶如鏡上痕、痕垢尽時光始現、心法双忘性即真」（永嘉玄覚『証道歌』）について、楊岐方会は、禅床を拍つこと一下して「山河大地何処有也」と問うている。禅床を打つ一声を聞いている体験そのままである時、聞く作用（心・根）と聞いている声（法・塵）とを区別することはできない、心と法とを二つ共に忘れているのが事実である。心の作用機能（根）とその作業内容（塵）とは、体験を異なる方面から眺めたに過ぎない。元来、心と法とを切り離し得ないにも拘らず、別物として差別することが痕垢であり、客塵煩悩なのである。心法双忘底の心性のみが真なのではなく、一切法も本来清浄であり、実相なのである。

一切法が一心の現成であり、一切法が清浄であると説くのは、馬祖道一が「一切法皆是心法」「一切法皆是仏法」と言うのと異ならない。この二句は、〈即心是仏〉〈平常心是道〉に比して世に知られていないが、同じ趣旨の教理的表現と言い得る。「一切法皆是仏法」について、楊岐方会は、禅床を拍つこと一下して「山河大地百雑砕、我に仏法を還し来れ」と迫り、「何似生遼天鶻、万里雲只一突」と自答している。禅床を拍つ一声に一切の仏法、一切の仏智が収め尽されている、一瞬の逡巡の間に真実を見逃してしまうという警告であろう。日常の体験底に仏道が現成していることを示している点で馬祖と同じ立場にあると推測される。「一切法皆是仏法」を引用した別の上堂で、楊岐は、「仏殿対三門、僧堂対厨庫。若也会得、担取鉢盂拄杖、一任天下横行。若也不会、更且面壁」と言っている。〈仏殿は三門に対し、僧堂は厨庫に対す〉という語は、仏殿・三門・僧堂・厨庫等の色法そのものが仏法であると説いているようであるし、また、各々が整然と調

和している有様から、各々が法位に住し円融無礙であることを示し、所謂、華厳教学の〈事々無礙法界観〉を示唆しているようでもある。しかし、それ以前に、仏殿より三門に、僧堂から厨庫へと視線を移動し、しかも、各々を見比べ、それらが相い対しているという判断をしている何処に真理があり、何を会得すれば修行が成就するのか、と問うべきである。一般に、〈平常心是道〉は、日常の行住坐臥における無心な行為や、機に応じ物に接する際の間髪をいれない行為のように理解され、また、通常〈禅経験〉と呼んでいることも、反省や思考が加わらない直接的な体験であり、主観も客観をも超越している純粋な経験として知られ、いずれも〈無分別〉が絶対要件とされる。従って、視線を移して見比べたり、判断を下すような〈分別〉は、仏法でもなく道でもあり得ないと考えられる。しかし、楊岐が言うように、一切法が皆仏法であり、仏殿が三門に対し、僧堂が厨庫に対していると会得するのが仏法なのであるから、思・慧・勝解・尋・伺等、所謂、分別することや分別されたことも仏法である、と会得するのが禅道でなければならない。そこに、一般の理解と異なる楊岐の教示点がある。

無為法は勿論、有為法も仏法であるならば、迷うべきこともなく、悟らねばならないこともない。楊岐方会が僧の「如何是仏」の問いに「賊是人做」と答え、続いて「万法是心光、諸縁惟性暁。本無迷悟人、只要今日了」と言っている処にもそれが明示されている。迷いの法と悟りの法があるのではなく、迷悟は人が勝手に捏造して差別するに過ぎない。前句に続く「山河大地有什麼過。山河大地目前諸法、総在諸人脚跟下。自是不信。可謂古釈迦不前、今彌勒不後。楊岐与麼、可謂買帽相頭」という楊岐の説法は、「万法に過ちがあるのではなく、諸法の主人となり自由に諸法を操ることができるのに、自ら信じないで迷い初め、過去の釈迦を慕い未来に彌勒を待つような主体性のなさに原因がある。本来迷悟がないと知り、即今主体性を自覚して一切の罪過を解消すべきである。しかし、このように言うすら本末顛倒の謗りを受けねばならない」と理解してよいであろう。一切が仏法であり、本来迷悟の人が無いのであれば、説くべき教法も無く、伝えるべき教理も有り得ないが、これを自覚せよと教示したり、ありもしない自縛からの解放を説くのは夢幻を説くようである。しかし、「楊岐無旨的、栽田博飯喫。説夢老瞿曇、何処覓蹤跡。喝一喝。拍禅床一下。参」で見られるように、無旨的なのに一喝や拍禅床一下で示していること、即ち、自明的なのに如実に知られない日常体験の実相が夢幻的なのである。この体験の実相こそ楊岐方会の教理の根底なのである。

〈キーワード〉　万法是心光、一切法是仏法、本無迷悟人

（正眼短大講師）